

『竹取物語』の女性性侍り文体と商業文

服 部 嘉 香

「女性性」という理由 平安朝時代には、書簡文体は、男子

に三体、女子に一体があった。男子は尺牘体と往来体と消息体の三体、女子に消息体の一体であるが、男子の消息体には、男性性侍り文体と女性性侍り文体との別が立てられるので、男子には四体という方が正しい。女子の一体は、仮名文字によるいわゆる「女消息」・「女をんななみ文」と呼ばれるものではあるが、男子も用いたのであるから、「女消息」・「女性消息文」・「女性侍り文体」など、女子専用のようにいう呼称は、特に平安中期以後において妥当でないこととなる。しかし、女性的性質を帯びたものとして「女性性消息文」と呼ぶ方が正しいといえる場合もある。あるいは、「女性的」・「女性調」といつてもよく、「軟質」もしくは「軟体」といいかえてもいい。相対して、男性の意味を冠する場合は、「男性性消息文」・「男性的」・「男性調」・「硬質」・「硬体」消息文とするのである。本稿では、「女性性消息体(文)」・「男性性消息体(文)」として対照させておく。

女性性消息体は、和文調の侍り文体を指す。それは、平安初期、男性文学独走の間にあつて『竹取物語』に現われ、男性性消息体は、

『竹取物語』の女性性侍り文体と商業文

漢文、もしくは擬漢文調の侍り文体として、平安後期、也文体と共に、『明衡往来』（別名『雲州消息』）によって大成された。和文調と漢文調との間には、もちろん内容の扱い方を始め、文体・文調・用語・語法の上に相違するところがあるが、語法についていえば、和文調の場合は、「急ぎまかて侍り。」（『源氏物語』）のように、文の終止には、ラ行変格活用の動詞としての終止形「侍り」が用いられ、漢文調では、「可動雜役侍」（『明衡往来』）のように、文の終止は、四段活用の動詞としての終止形「侍る」で結ばれるのであつて、したがつて、女性性消息体は「侍り文体」、男性性消息体は「侍る文体」と呼んで区別することもできるわけである。

なお、室町時代に始まり江戸・明治時代にかけて用いられた候（まゐらせ候は、「侍り」が鎌倉時代武士用語から起つた「候」に圧倒されて衰退し、女子も「候」を用いるようになった結果、語調を和らげて「まゐらせ候」とし、女子専用の敬語的表現としたものである。

仮名で書かれた竹取書簡 『竹取物語』は、その内容、その原拠、その作者、その文章、その文体、その成立年月などについて諸説様々、むしろ紛々であるが、本稿では、巨細にわたる検討は避けておく。岡一男博士の、作者は僧正遍昭、年代は貞観十八年のあ

たりからとして、西暦の八七六年以後と見、文体は擬漢文もしくは宣命体の真名文の原文があったかという加納諸平の推考を排して、最初から仮名文字で書かれたものだとする説に従つておく。そうすると、「竹取」は、紫式部がいった通り、仮名文字で書かれた「物語の出で来はじめの祖」であり、であるならば、同時に、中に収められた書簡も、和文で書かれた「消息文の出で来はじめの祖」となる。それは、次の五通である。

【一】 代金下賜の願状（漢部内磨からかぐや姫へ）

皇子の君、千余日いやしき工匠らともろともに、同じ所に隠れぬたまひて、かしこき玉の枝を作らせたまひて、官も賜はらむと仰せたまひき。これをこのごろ案するに、御使とおはしますべきかぐや姫の要じたまふべきなりけりと承はりて、この宮より賜はらむ。

【二】 注文請状（唐商王卿から阿部御主人へ）

火鼠の皮衣、この国になきものなり。音には聞けども、いまだ見ぬものなり。世にあるものならば、この国にもてまうで来なまし。いと難きあきなひなり。しかれども、もし天竺にたまさかにもて渡りなば、もし長者のあたりにとぶらひ求めむに、なき物ならば、使に添へて金をば返し奉らむ。

【三】 不足代金請求状（王卿より阿部御主人へ）

火鼠の皮衣、辛うじて、人を出して求めて奉る。今の世にも、

昔の世にも、この皮はたはやすくなきものなりけり。昔かしくき天竺のひじり、この国にもて渡りて侍りける、西の山寺にありと聞きおよびて、おほやけに申し、辛うじて買ひ取りて奉る。価の金すくなしと、国司、使に申ししかば、王卿が物加へて買ひたり。今、金五十兩賜はるべし。船の帰らむにつけてたび送れ。もし金賜はぬものならば、皮衣の質返したべ。

【四】 慰謝の文（かぐや姫から竹取の翁へ）

この国に生まれぬるとならば、歎かせ奉らぬほどまで侍るべきを、侍らで過ぎ別れぬること、返す返す本意なくこそ覚え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせたまへ。見すて奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地する。

【五】 哀別の文（かぐや姫から帝へ）

かくあまたの人をたまひて留めさせたまへど、許さぬ迎へまうで来て、とり率て罷りぬれば、口惜しく悲しきこと、宮仕へつかう奉らずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ずおぼしめしつらめども、心づく承はらずなりしこと、なめげなるものにおぼしめしとどめられぬるなむ、心にとどまり侍りぬる。

今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでぬる

以上五通の外に、歌書簡の往返が数ヶ所にある。

まず、書簡の文体として、左の諸点に注目しておきたい。

竹取書簡の書簡現象

書簡文としての新しい現象は、次の六ヶ条である。

- (一) 女性性消息文が、書簡史上最初に現われたものであること。
- (二) それが男子によって作成されていること。
- (三) 女性性待文はべり体として未来性を持っていること。
- (四) 発信者が庶民男子・商人男子・貴族女子であり、受信者が女・男・男(帝)であること。
- (五) 書簡意欲の裏付によって鄭重味を含み、すでに言文一致でないこと。
- (六) 明治・大正時代のものかと思われるほどの内容を持つ商業書簡文のあること。

第一の、女性性消息文が男女両用として『竹取』に初見であるか否かは、確信を以て断定し兼ねる。『竹取』以前に、また同時代に、類似の物語・説話の類が絶無だったとは断定し兼ねるからである。九世紀の後半に、貴族・庶民の間に、粗雑あるひは雅拙ながらも消息体の書簡が取り交わされていて、そのあるものが物語・説話の類に利用され、そういう消息文を含む多くの物語作品の中の鶏群の一鶴として『竹取』のみが伝えられたかも知れない。突如として『竹取』一編のみが孤立した名作として出現したと思うには、構想・構文があまりに整い過ぎていての感があるが、要するに、現在のところ、現存のものとしては最古の名作に最初の名文書簡があるという事実は否定できない。

第二の、それらの女性性消息文が男子作であることは、こういう文体革命の偉業が学識ある男子の手によって開拓されなかったなら

『竹取物語』の女性性待り文体と商業文

ば、新文体の開花は、今少し長い低迷・低調の期間を要したであろうと思うことによって証明される。女子を貶下しているのではない。男子の教養が必須で、厳しく、激しいのに対し、女子が長く「才」の外に置かれていたための準備不足を思うのである。

紀貫之の『土左日記』は、作者を女子に仮託し、女文として書いているが、貫之が漢文の書ける学識者であったから、文致も和文体ながら、漢文式に簡潔・淡泊で、時として生硬な部分もあり、後期の女流全盛の頃に見るような物のあはれの情趣・余情・甘え・美化といったような趣が見えないのは当然とていいことであって、男子が女文の創定を試みたがためであろう。それが『竹取』となると、『土左』よりは六十年ばかり先んじた作品でありながら、作り物語と実録物との相違があるとはいえ、和文で書かれた文品が健康で、素朴で、流暢で、一と息に二節を刻む短節文、地の文、会話の文、消息の文には長・短節文の変化に意を用い、物のあはれの情趣・余情・甘え・美化もなかなか豊かである。これは、後に女流作家が短節文以外は、範とした技巧といつてよく、同じく男子作でありながら、『竹取』が『土左』以上に遙かに女文の趣を示している点は、平安文化生活の女性化がすでに萌していたからのことであろう。

第三の、女性性消息文が待文体であることは、平安全期を通じての主調であるが、その最初の片鱗が『竹取』にあることは注目すべきところである。王卿の文に一ヶ所、かぐや姫の文に僅かに五ヶ所を数えるだけであるが、地の文には多く用いられ、会話の部分に更に多く、消息の中の六を一とすれば、地の文の頻度数は五、会話の

部分のは十の割合であるかも知れない。敬語としては、「奉る」、「給ふ」が主調をなしてはいるものの、「侍り」がやがてこれに代ろうとする未来性が看取される。わたくしの計算によれば、諸本によって異同はあるが、侍文体の消息の重なるもの数は、「竹取」に五、「落窪物語」に五七、「蜻蛉日記」に一三三、「源氏物語」に二七一、「枕草子」に一九である。侍文体が「竹取」に始まって「源氏」に最高峰を見せているのである。

第四に、発・受信者の関係において、その頃、貴族・庶民の間に書簡往返の事実があったことが暗示されている点に注意したい。文例〔一〕は、宮中奉仕の金銀細工人の長、漢部内膳がかぐや姫に充てたもの、文例〔二〕と〔三〕は唐の商人から阿部御主人に送ったもので、この三通の発信者は庶民と見てよく、受信者は、かぐや姫を貴族の姫君とすれば、宮中の帝と共に貴族階級として対させることも無稽でないから、姫と帝との和歌の往返や、帝への姫の哀別の書状も、貴族相互の文と見てよく、竹取の翁への感謝の文は育ての親へのもので、目下から目上への書簡の例となる。帝と姫との間では、「御文を書きて通はせ給ふ。御返事さすかに憎からず聞えかはし給ひて、おもしろき木草につけても、御歌を詠みてつかはす。」と本文にあって、その歌文が出ていないのは残念であるが、文では上下の別があり、歌では同格であり、往返も度々であったことが推測される。

第五の、鄭重味ということ、これもまた注目すべきものがある。国文学者・国語学者の間では、平安朝物語類の文章は当時の口語体を写したものだという説が多いのであるが、必ずしも妥当だとはい

えないものがある。最も古い「竹取」でも、口語直写の跡はすでに薄いのではないか。「落窪」や「蜻蛉」でも、本文にはユー・マラスな文致がありながら、書簡となると、「雨蛙」(「蜻蛉」)「尼帰る」のしゃれ。など稀少の例外を除いては諧謔性を棄て、生まじめな文章としているし、敵愾な文章さえ少なくない。ということは、消息文がすでに言文一致でなく、言文分離となつてゐることを示しているのである。その理由は、消息文は、身分の高下を問はず、鄭重に書くべきものであるし、相手によって文章の待遇に注意すべきであるという意識があつたがための文章への表われではないか。「文選」あたりからの直接の影響があつたとはいえないけれども、書簡としての形式化ということが、自然に芽生えていたのではないか。卑自敬語の「侍り」が女性性消息文の中に、「侍る」が男性性消息文の中に浸染・深化して数多いのも、そういう心理の潜在からのことだと思われるのである。

第六の商業書簡文のこと、これは実に驚くべき現象といわねばならぬ。作者が博学の僧正遍昭であるとしても、彼の創作とはいえないであろう。第一、日本人の根性から出たものとも思えないのである。委しく後述したい。

二

わが国最初の庶民書簡

文例〔一〕は、特にわが国最初の和文の書簡としての名譽を持つ。古く万葉仮名書簡二通はあるが、完文ともいえないし、先行例も、後続例もない。したがって、「竹取」以前に消息文を収めた物語・説話の類が発見されない限り、文

例「一」は極めて貴重な、名譽ある、わが国最初の女性性消息文とせねばならん。かぐや姫が、いい寄る皇子や貴族のうるさい妻問いに困じ果てて、そのうちの五人を選び、それぞれに難題を持ちかける。石作皇子には天竺にある仏の御石の鉢を、車持皇子には東海の蓬萊の山にある黄金の木の一枝を、右大臣阿部御主人には唐土にある火に焼けぬ火鼠の裘（皮衣）を、大伴大納言には竜の首にある五色の珠を、石上中納言には燕の持つ子安貝を持ち帰って賜わるならば、その方のお氣持に従わうという。そのどれもが実在しないことを姫が承知の上での難題であるが、そのうち、車持皇子は「心たばかりある人」で、隠れ家に金銀細工に長けた工匠ら六人を入れて似せ物の黄金の木の枝を造らせ、かぐや姫に持参したところへ、折から六人の工匠が庭に来て駆込み訴えをする。長の漢部内磨が文挾に挾んだ文を差出すので、姫は「この奉る文を取れ。」といい、取り上げて披見すると、文例「一」のように書いてある。奸計が露見する。皇子は一生の恥である、深山に隠れ住んで、姿を見かける人もなくなつたという物語なのである。漢部は帰化人の姓であるが、何代かの後であろうから日本人と見ていいであろう。作物所つかきどころの司つかさどであるが、家子の賃金を皇子の御使（妻妾の義）であらせられるかぐや姫より頂きたいというのであるから、庶民と見ていいであろう。文を文挾の先に挿して差出すのは貴人への礼であつたから、この点からも庶民の礼に従つたことが解る。文も、敬語は多いが、焦り気味の口調で、十分には整っていないところも、却つて庶民らしきを見せている。要するに、わが国最初の和文の女性性消息文が、庶民からのもので、男子の作で、内容が、賃金下賜の願状、

「竹取物語」の女性性持り文体と商業文

純商業文ではないが、代金請求状であることは、日常往返の普通消息文もかなり行われていたであろうことが想像させられる。

貴族の歌書簡 この段の物語には、歌書簡の往返が二回ある。

一つは竹取の翁が車持皇子の苦心談を聞いて深く同情した歌とその返歌である。

【六】 竹取の翁から車持皇子へ歌書簡

くれ竹のよよの竹とり野山にもさやはわびしきふしをのみ見し

【七】 返し

わが袂けふ乾ければわびしきの千種のちぢよの数も忘れぬべし

竹取の翁が、私も長らく生業の上に苦勞をして来たが、お話のよ
うな苦しきに遭うたことはない、と同情したに対して、車持皇子は、
苦心・艱難を重ねて、涙に袂も濡れたが、今日は黄金の枝を差上げ
たので、それも乾いて、苦勞も忘れたことよ、と応えたのである。
また、皇子と姫との間にも歌の往返がある。

【八】 車持皇子からかぐや姫へ歌書簡

いたづらに身はなしつとも玉の枝に手折らでさらに帰らましや
は

【九】 返し

まことかと聞きて見つれば言の葉もかされる玉の枝にぞありけ

たとえ命を失うとも、玉の枝を手に入れないでは帰りません、というのに対し、工匠らの駆込み訴えがあった後なので、かぐや姫からは、偽物と知って安心した。言葉で欺いた偽物であったことよ、と応えたのである。

わが国最初の商業書簡文 文例〔二〕・〔三〕は、唐の国の

貿易商王卿の文として書かれている。純粹の商業書簡文で、商魂の逞しき、懸引の巧みさは正に唐国根性丸出しであるが、しかし、事は貞觀期の日本の世相を反映しており、あるいは、実際に商取引に使われた文書があつて、偶然日本の作者に利用され、見事な女性性消息文の形となったのかも知れない。当時上流社会には奢侈・淫逸の風俗が起こり、家は寢殿造となり、衣服・調度も華美を極め、歌舞・音曲・歌合・詩合・扇合・双六・囲碁・曲水の宴等々、あれこれの遊びが盛んに行われた頃である。この感情浮動に乗じて商人が活躍し、男女貴族への誘惑も甚だしくなり、国内需給では事足りず、唐商の輸入も歓迎された折柄、阿部御主人は火鼠の皮衣の必要に迫られた。そこに、たまたま唐土船が当時日唐貿易の要港であつた博多の浦に來たことを知つて、御主人は、小野房守というのを使つて、唐商王卿が滞在する博多附近の唐人町に遣わし、前渡金幾ばくかを添え、書簡を以て火鼠の皮衣を注文する。その返事が文例〔二〕である。文意は、——御注文の品は唐国（日本の意ではない。）にもございませぬ。名に聞いたことはありませんが、一見したことはありません。この世にあるものならば、唐にも來ておるかも知れませ

ん。それとても見込み薄でありますが、幸いにインドにもありますして、たまたま唐に渡來したのを富豪どもが持つていましたならば買ひ受けて参ります。もし品物入手が困難でしたら、お預りの前金は御返済いたします、というのである。阿部御主人は、日本にないと思うので自分（唐商）に注文した。しかし、唐にもないらしい。王卿は「占めた！」と思つたであろう。まず抜け目のない注文請状を送つたのである。

小野房守は同船して唐に渡り、やがて博多に帰着した。そのことを直ぐ京に知らせる。御主人は脚の速い駿馬を以て博多に房守を迎える。房守はその馬を飛ばして、箱詰の皮衣と王卿の書簡を携え、僅か七日で京に帰り、御主人に皮衣と文例〔三〕の納品通知兼不足代金請求状を渡す。その内容は、——苦心の末、御下命の火鼠の皮衣を使を出して買ひ入れましたので上納いたします。現今はもちろん、昔とでもこの皮は容易に入手しがたい物でありました。幸い古い頃、インドの尊い高僧が唐に持つて來ておりましたのが西方の山寺にあると聞き及びましたので、なかなか手離しませんのを、公儀のお声かかりを煩わし、ようやく買ひ取りましたので差出します。世話になりましたその地の役人が代金不足の由を使に申しましたので、私が立て替えて支払つておきました。お預りの前金の外に金五十兩を、弊船出帆前に間に合うようお届け願ひます。もし不足金を下さらぬ場合は、皮衣の現品をお返し願ひます、というのである。御主人が現品を見ると、箱は瑠璃を様々に彩色してあり、皮衣は紺青に輝き、毛の末端は金色燦然としたものなので、僅かな不足金、何程のことがあるうかと、歓喜して唐の方を伏し拝み、自分は門の

ところまで持参して、竹取の翁を通じてかぐや姫に届けさせる。姫はこれを見て、一時は、あるいは本物かと、不安を覚えたぐらいたったが、この皮衣を火に焼いて、もし焼けない時は、結婚の承諾もやむを得ないかという由を翁が取り次ぐと、御主人は天にも昇る心地で火に焼くことを承諾する。焼かせてみると、「めらめらと焼けぬ。」（「めらめら」は諸書に解を示していないほどの名句である。「ぼやぼや」とだけでは当たらないが、「火がなめるように、ぼやぼや」とでもいう感じである。）という始末となり、「大臣、これを見給ひて、御顔は草の葉の色してゐたまへり。」と、悲喜劇で終るのである。

王卿の文は、二通とも委曲・周到、抜け目のない、模範的な商業文である。前には、品の見つからぬ節は、前受金は返すと書いておりながら、後の文では、不足金を下さらないなら、現品を返却されたいと云って、前受金のことには何ら触れていない。違約金として没収する意味を示す文言があるわけでもない。また、王卿は北九州地方に幾日か商売をするので、「船の帰らんにつけてたび送れ。」と書いているのであるが、一種の居催促でもある。まことにずるさを隠した抜け目のない文であるが、地の本文に抜け目のあるのは、どうしたことであろうか。『本草綱目』には、火鼠は西域、南海大州の野火の中に産し、その毛皮で布に織るが、汚れた時には火中に入れて洗うとある。この火に焼けぬ意味のことは、かぐや姫の最初の難題申出での時にいわせたかった。また、本文には、

かの唐土船来けり。小野房守まうで来てまう上る、といふふ

『竹取物語』の女性性待り文体と商業文

聞きて、歩み疾うする馬をもちて、走らせ迎へさせ給ふ時に、馬に乗りて筑紫よりただ七日に上りまうで来たり。

とある。房守が王卿の船で博多に帰着し、上京する由を誰が阿部御主人に知らせたか。それを聞いて駿馬を博多へ走らせて房守を迎え、房守はその馬で七日で京に上ったというのであるが、『竹取』に後れること五十年、延長五年（元七）に奉進した「延喜式」によれば、京都から大宰府までの行程は、上り三十日、下り十四日、海路ならば上り下り共に三十日を要するとある。「筑紫」とあるのは博多近くの唐人町のこと、大宰府よりは少し近く、五十年前後もあるの、多少の相違はあるが、仮に同じ日数とすれば、房守の博多着を京に知らせるに上り三十日、御主人が房守の帰国を知って即日迎えの駿馬を走らせたその馬は下り七日、房守がそれに乗って京に帰り着くまでが七日、そこで御主人は皮衣を見て驚喜し、唐の方、多分王卿の書状までを伏し拝み、房守が別使を仕立てて不足金五十両を博多で待つ王卿に届けさせるのに駿馬の便によるとして更に七日という手順になる。これでは、房守の復命は四十四日目となり、王卿が五十両を入手するのは五十一日目となるが、どんなものであろう。房守は、なぜ、博多着と同時にその地の駿馬を備つて、七日なり、十日なりで入京する手段を採らなかつたか。本文では、一頭の駿馬が七日で行き、七日で帰ることになるが、いかに駿馬であっても、それはあり得ないことであろう。仮に馱馬の便を利用して、宿場々々で馬を代え、乗り継ぎ乗り継ぎ急ぐとしても、往復共片道七日はむづかしいであろう。待ちに待つ御主人に一刻も早

く屈けて喜ばず場面を描こうとして、「歩み疾うする馬」によって「ただ七日に上り」という鮮やかさを見せようとしての、作者のミスではないのか。

また、くせ者の唐商王卿が、不足金五十兩と引換にしないで、前以て房守に皮衣を渡すというのは、大様に過ぎる感があり、唐人の商慣習としても、どうかと思う。注文主を信用しているとしても、五十兩のために五十一日も待つというのは、北九州各地の取引に幾日かを費すとしても、長過ぎる滞留となりはしないか。

今一つ、文例〔三〕には一ヶ所「侍り」がある。尊い高僧についての叙述であるから、敬意を含めてのことであろう。女性性消息文に現われた最初の「侍り」として記録しておきたい。

王卿の二通の文は、大正三年十月初刊の拙著『最新商用文精義』に引用したのが最初の紹介である。(後出の二・三の類書に転載されている。)題材からいって純粹に日本種ではなく、中国種であろう。当時舶載の向こうの小説などにあったものを和文化的なのかも知れないが、まだ出典を見出しかねている。大方の御示教を仰ぎたい。一千一百年ばかりも前、十世紀にも入らぬ頃に、日本の散文文学の第一名作品の「竹取物語」の中に、こういう模範的な商業書簡文があることは、奇蹟的な驚きである。文学史では軽視しても、書簡史の上からは貴重な文獻的価値を認めねばならぬものである。

皮衣についても歌書簡の往返がある。阿部御主人が皮衣を竹取の翁に渡す時に歌〔一〇〕を添えたのは、今日こそは涙に濡れた袂も乾いて、皮衣を暗着に着ることでしょうと、心も浮き立つ思いからであるが、「めらめらと焼けぬ」となり、姫は箱に返歌だけを入れ

て返したのである。

【一〇】 阿部御主人からかぐや姫へ歌書簡

かぎりなきおもひにやけぬ革ごろも袂かはきてけふこそは着め

【一一】 返し

のこりなく燃ゆと知りせばかわごろもおもひのほかにおきて見ましを

返歌〔一一〕は、無残に燃えつくしてしまふものと知っていたならば、心配などせず、「思ひ〔≡火〕」の外に置いて、焼かずに眺めていたものを、の意である。

女性性侍文体の最初の名文 文例〔四〕・〔五〕は、かぐや

姫の消息として書かれている。物語の構想が、化身説話・求婚説話・昇天説話から成り立っているので、消息文も、古い頃か、当代に流布した伝説・説話の中にあるものの転用かも知れないが、今は確かめようがない。いずれにしても、もちろん原作のままではないであろうし、恐らく「竹取」の作者が改作したものであろう。書簡史の上からは、王卿の文は中国種、かぐや姫の文はその典拠が中国種でなく、純日本種で、日本人の作になる和文消息文であると思われる。発信者は女性であるが、文は男子の作であること、女性性消息文体がこれに始まることは前に六ヶ条中に挙げたが、上層階級の文であること、女性調侍文体として名文であること、それが「竹取」に初見であること、などをつけ加えておきたい。ここに上層階級と

いうのは、貴族階級のことである。かぐや姫は月世界の美女であるが、美を愛する平安女性の逸群性のあこがれの擬人化であり、帝も平安男性の尊崇する最高の存在として、女性にはこの上ないあこがれである。竹細工人であった竹取の翁はかぐや姫のおかげで富み栄え、五人の貴族と同列の生活者となったのであるから、書簡史的には、この二通の消息の発・受信者を貴族と見て差支はない。貴族消息であるから、前の三通の庶民の文に較べて遙かに品格がある。

王卿の文は商業書簡文として模範的だといつたものの、文としてはたゞどしく、文意を貫ぬきたいところもある。かぐや姫の文は流麗・暢達で文意も徹り、敬意・情味共に豊かである。四ヶ所の「侍り」は、原意のままの動詞、敬語としての動詞、丁寧語としての動詞、助動詞のように用いられた補助動詞としての役目を果たしており、早くも後々の自在性を見せているのであって、侍文体の起源として変化ある用法を示しているのである。「侍り」の数は少ないが、「侍文体の祖」とすることに於いて十分の意義があるとせねばならぬ。

京都・博多間の旅程については、なお一疑がある。初めの唐船博多人港のことを阿部御主人がどうして知ったか、王卿が着報を送ったとすれば上り三十日、小野房守が命を承けて下向するのが下り十四日、計四十四日を要し、その間、王卿は、北九州の各地を商用旅行することになるので、やはり長過ぎる感がある。原文には「その年わたりける唐土船の王卿といふ者の許に文を書きて」、心たしかな小野房守を使として、「かの浦にをる王卿に金を取らす。」と

「竹取物語」の女性性侍り文体と商業文

あって、旅程のことは何とも見当がつかない。本稿では、唐船再来の時の、駿馬が七日で着京したという点に違和を感じたので、その方を問題とするに止めた。旅程の、上り三十日、下り十四日という点も、理由がはっきりしていないが、ここには問題外としておく。

4 ページの上段、帝とかぐや姫との歌文の往返について、帝のは「おほん歌」とし、かぐや姫に「おん返りごと」とあるのは誤植ではない。上代には、敬語「み」に「御」字を充て、特に天皇には「大」字を冠して「大御」おほみ」として用いたが、その「み」が撥音便で「ん」となり、「おほん」と読むようになったので、「おん返りごと」はかぐや姫のものだと解るのである。